

中島峰広著：『日本の棚田－保全への取組み』

古今書院 1999年2月

A5版 240 ページ 3200円 (本体)

今日、破壊が進む自然環境や荒廃する国土を眼前にして、研究者のみならず一般市民の間において、自然保護や国土保全への関心がかつてないほど高まってきている。棚田への関心もその一つであり、本書はこのような背景をふまえて出版された待望の書といえよう。

著者は、棚田のほか畑地灌漑の研究などで知られる農村地理研究者である。本書のあとがきによると、著者が棚田の研究をはじめようになったのは、1970年代前半に農業水利研究の権威として知られた故竹内常行氏の研究を手伝ってからであるという。その後著者の関心は畑地灌漑の研究に向けられ、棚田の研究はしばらく中断されたが、1995年に開かれた国際地理学会での発表を契機に著者の棚田への関心は再興した。そして荒廃しつつある棚田をなんとか保全すべく、ほとばしる情熱をもって一気に調査が進められ、まとめあげられたのが本書である。その構成は次のとおりである。

はじめに

- 1 棚田の起源とその用語
- 2 棚田についての先行研究
- 3 棚田の分布と地形との関係
- 4 棚田の形態と特質
- 5 棚田の灌漑施設と水利慣行
- 6 棚田の機能
- 7 棚田の耕作放棄
- 8 棚田の保全
- 9 棚田保全への取組み
- 10 保全方法の比較と検討
- 11 棚田オーナー制の展開
- 12 棚田オーナー制についての比較検討とその評価

おわりに

章立てからわかるように本書の内容は、わが国の棚田の現状を分析した部分(1～7)と保全のあり方を論じた部分(8～12)に大きく二分される。本書のサブタイトルからすると、著者の力点は後者の部分にあるかと思われるが、前者の部分が本書の半分以上を占めることや、本誌の性格から、前者の部分を中心に本書の内容を構成に沿って簡単に紹介してみよう。

第1章では、棚田の起源は飛鳥地方では古墳時

代に遡り、その他の畿内周辺地域では室町時代に求められるとし、「棚田」という言葉の初出は1406(応永13)年の日付のある高野山文書であることを明らかにしている。そして棚田とは傾斜地に階段状をなし、畦畔をつけてひらかれた小区両の水田であるとしつつも、本書ではそれを定量的に捕らえるため、農水省の資料をもとに、傾斜1/20以上の土地にひらかれている水田をすべて棚田とみなすとしている。

第2章で棚田に関する既存の研究が簡潔にまとめられた後、第3章では棚田(傾斜1/20以上の土地にある水田)の全国的な市町村別分布図が示され、棚田の分布の地域的な特徴と地形との関係が論じられている。西南日本に棚田が多いのは、水田開発が東北日本に比べて早くから進められたためとされるほか、注目される地すべり地との密接な関係については、棚田は地すべり自体によって形成されたものではなく、地すべりによってつくりだされた保水性に富む緩傾斜地が棚田造成の好適地とされた結果であるとしている。

第4章では、棚田の形態上の区分が、緩斜地の棚田(傾斜1/20程度)と急斜地の棚田(傾斜1/6以上)、土坡の棚田と石積みの棚田という土地の傾斜と畦畔の材質の違いによってなされ、その地域的な分布の違いや、石積みの方が土坡よりも歴史的に新しいことなどが述べられるとともに、棚田造成に要した労力は、10a当たり延べ400人程度に及んだことが論じられている。なお急傾地の棚田は、景観的にはもともと棚田らしい棚田とされ、傾斜1/20以上の棚田と同様に、全国的な市町村別分布図が示されている。

第5章は「棚田は必ず何らかの灌漑水源をもっている」という竹内氏の教えをもとに研究が進められた部分であり、全国各地の例をもって横穴(横井戸)や長大な用水路などによる棚田の灌漑のあり方が示されるとともに、生駒山麓ほかの事例ではかつてみられた複雑な水利慣行のあり方が解明されている。著者の得意とする分野だけに、棚田の現状分析では、次章の内容に次いで重きをなす部分であろう。

第6章は、棚田の機能の分析である。棚田には生産の場としての機能のほか、保水機能、洪水調節機能、土壤浸食防止機能などがあるが、本書ではそれらへの言及は少なく、棚田景観の分析に多くの頁が割かれている。「景観」を「機能」としてとらえるのは一見意外な感じがあるが、棚田景観

は、好ましい田園風景を形成する役割（機能）を果たしているという観点から分析がなされている。主要な棚田景観の選出にあたっては、「棚田フォトコンテスト」の応募者リストを利用するというユニークな手法が取られ、とりわけ優れた20ヶ所ほどの棚田景観については、著者の現地調査を踏まえた的確な解説がなされている。あとがきにもあるように、この部分は著者が研究手法の面で最も苦心された部分であり、70ヶ所近い棚田の現地調査をふまえてまとめられていることから、本書で内容的に最も重みのある部分と思われる。

第7章では棚田の耕作放棄の現状が、道府県、町村、集落といった異なるスケールで検討され、それをふまえて第8章以下では荒廃しつつある棚田の保全方法が検討されている。本書では棚田の保全のあり方として、3つの類型が設定されている。それは、棚田を観光資源として位置付け保全を図ろうとするもの（現状維持・観光開発型）、オーナー制などにより都市住民と農村との交流を図り保全しようとするもの（現状維持・交流共生型）、最小限の基盤整備を行い付加価値を高めた米の生産により主体的に棚田の保全を図ろうとするもの（基盤整備・営農対策型）である。そして現状維持・観光開発型の事例として輪島市白米地区が、現状維持・交流共生型の事例として三重県紀和町丸山地区が、基盤整備・営農対策型の事例として岡山県中央町大坪和地区が取り上げられ、そのあり方の比較検討がなされている。最後に現状維持・交流共生型の保全方法で特に注目される棚田オーナー制について、最初にそれが試みられた高知県梶原町神在居地区ほか3地区が事例として取り上げられ比較検討されるとともに、グリーン・ツーリズムとの関わりが論じられている。

おおよそ以上のような内容をもつ本書の最大の特色は、オーソドックスな地理学研究と社会的な関心の高まりを背景とした実用的な研究が見事に統合されていることにある。学問研究は、最終的にはより良い社会の発展に資するのが望ましいということは誰も否定しないであろう。しかしながらそのような研究を実践することは難しく、本書はこの意味で、理想的な研究のあり方が体现された地理学では数少ない研究書といえる。そのような研究が可能であったのは、著者が研究者であるにとどまらず、棚田支援の市民団体の代表を努めるなど、棚田保全の活動に積極的に関わってきたからであり、それは研究者のあり方の範をしめ

すものであろう。本書の意義はこれにとどまらず、研究テーマおよび研究内容の面で、オーソドックスな地理学研究的の価値を再認識させてくれる点にあり、評者はここではむしろこのことを強調しておきたい。

棚田の研究それ自体は、耕地（地表）の形状を問題とするという意味できわめて古典的な地理学の研究テーマであり、それゆえどちらかという土地味な内容の研究である。近年の若手研究者には敬遠されがちな研究であろう。しかしながら、そのようなオーソドックスで地味なテーマとその研究内容こそが、地理学が社会へアピールしうる中身を持つものであることを本書は思い起こさせてくれる。著者が丹念に作り上げた棚田の全国的な分布図が新聞紙上で取り上げられ話題となったのは、そのことを如実に示している。更埴市姥捨地区をはじめとする主要な棚田地区の土地利用図は、その作成に要した労力は察して余りあるが、他分野の研究者にはなし得ない決定的な仕事であり、今後棚田研究の基本資料として広く活用されつづけるに違いない。また、本文中ではさらりと書かれているが、梶原町神在居地区の棚田の水利に関して、確固たる灌溉水源を持つことを示し、『街道をゆく』における司馬遼太郎氏の記述、すなわち棚田の用水は谷から汲み上げられているとする説明を正す部分は、一般読者に学問研究の価値を知らしめるものであろう。

このような本書に、評者があえて注文をつけるならば、内容的には棚田の機能の分析において、棚田の実用的な機能としては真っ先に思い浮かぶ保水、治水機能の分析が非常に手薄であることである。もっともこの点については著者も十分認識されていることであり、今後この方面の研究が進められることが期待される。また、全国の主要な棚田地区の解説に際しては1/25,000地形図が添えられているが、それから棚田の分布を読み取ることはなかなか困難である。とくに重要な棚田景観の分布域だけでも、網掛けか何かで地形図上示されていたならば、読者は大いに助かったであろう。

しかしながらこれらのことは、本書の価値をいささかも損なうものではない。見事な棚田景観の写真を用いた装丁は魅力的であり、価格も類書に比べると手ごろである。地理学が社会へ発信できる好著として本書を広く推奨したい。

（中西僚太郎）